

J・A・コメンスキー

T・G・マサリクの講演から(1)

大梶 優子



「昨年正月のことになるが、新しい社会体制で就任したばかりのV・ハヴェル大統領は、年頭演説をこう結んだ。

「私にとって、最も意義深い前任者であるマサリク大統領は、最初の演説をコメンスキーの言葉で始めましたが、私はその言葉で年頭の挨拶を終わらせていただきます。

——人々よ、政権は再び自分達の手に戻りまし

た。」

コメンスキーは、それを悲願の言葉として表し、それが実現するまでに準備すべき民族の課題を提起した。チェコが、一六二二年に白山の戦いで負け、続く三十年戦争の終結にチェコ民族の独立を賭けたにもかかわらず果たせなかった時のことである。コメンスキーの言葉は、民族の悲願となって、約三百年後のチェコスロヴァキア共和国の誕生を待つこと

になる。

T・G・マサリクは、その初代の大統領として、自由・民主主義・人道主義・道徳性を基本的な柱に、近代国家の基礎を築いたが、その背景では、十九世紀半ばから力を強めてきた民族復興運動と、その運動の中で見直され、再評価された民族指導者としてのJ・A・コメンスキーが大きな役割を果たしている。

最近の週刊誌の中に、偶然、当時カレル大学教授であったマサリクが、一八九二年三月二十八日、コメンスキーの生誕記念日に学生達へ向けて講演した記事を見付けたので、ここに紹介したいと思う。十九世紀のチェコ語で書かれた文章は、私には難解なところも多いのだが、チェコ民族独立の気運のたかまった社会状況でのコメンスキーについての講演ということで興味深いものがある。

「皆さん、私は皆さんと内輪の仲間としてお話し

することができ、公けの祝賀用の講演をする必要がなくて、うれしく思っています。多分、私にはそうできそうにありません。

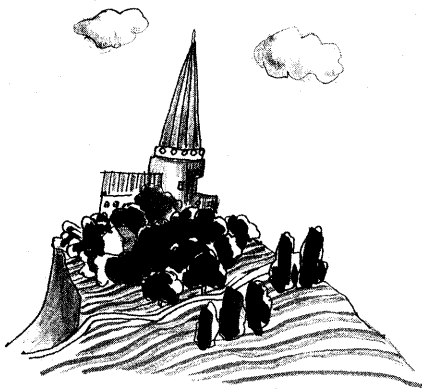
コメンスキーのような人物を、私達はただ讚美するだけに留めるべきではありません。言うなれば、このような偉大な人物の遺言を守ってきたかどうか、今でも守っているかどうか、各自の良心に問うべきです。

コメンスキーは、偉大な人物です。偉大な人物の運命は、往々にして奇妙なものです。しばしばその重々しい権威で、その偉大さをつくりあげてしまう場合がありますし、またその後継者達が、偉大な人物の成し遂げたことを発展させずに、すっかりそれに頼り切っているという場合もあります。こうした場合は、その人物は偉大なのではなく、普通の人なのかもしれません。人間思考の分野の歴史では、アリストテレスの例があります。彼は何百年もの間、人間学の師でした。けれどもそれは、彼自身の偉大

さからなのではなく、誰も彼を越えられないという観点からのものでした。有難いことに、その意味ではコメンスキーも偉大な人物とはいえませんが。コメンスキーは、少し違ったやり方で人類に貢献しました。彼は、自分の世界観、思想、目標で、人間生活を明るくし、同時に暖かくしようとしました。それは、公けのことがらを修正、改善していく大きな努力から生まれました。チェコでは、宗教改革を二つのタイプの人々が成し遂げました。(注・チェコの宗教改革の先駆者は、ヤン・フスで、十五世紀のことである。この後継者となる二つの派を指す。)ターボル派とチェコ同胞団です。一方は剣で、他方は言葉で、また一方は力で、他方は愛をもって改革を押し進めようとしました。チェコ同胞団の純粋なタイプは、まさにコメンスキーです。

そのチェコ同胞団の道徳的な基盤の上に、世界観、思想体系を築く努力がなされています。(注・中世の)古い秩序が崩れ、新しい秩序の形成が半ば

といったような時代の、未来への展望が明らかでない状況での改革への願望です。それが、世界全体についての自分の考えを確立し、人間の生や死についての自分の見解を明らかにする努力に結びつきました。それを、どのような人も受け入れることができ



て、いつでも、どこでも生活の中にとり入れ、成り立たせられるようにしたいと考えたのです。

彼の草稿『人間の現実の改善に関する人類あての総勧告』で、自分の哲学的努力の構想を述べています。それは、人間世界の全領域にわたる改善についての計画です。そのためには、全領域にわたる基盤が用意されていなければなりません。『汎黎明 (panaugria)』の中に、『汎知 (Pansophia)』が与えられることです。その課題は、(注・混乱した現実、バラバラな知識) あらゆるものの連関をとらえて、つながりを明らかにし、秩序だてていくことです。その理論的基礎の上に、『汎教育 (Panpaedial)』が生じ、すべての人々の精神を向上させます。『汎言語 (panglotia)』は、言語を通してのよりよい理解に導きます。『汎改革 (Panorthosia)』は、この改善を最後までやり通せるための方法を提示します。『総勧告 (Panuthesia)』は、一般的な注意で、これらが普遍的な改革につながってお

り、これによって、人類の課題が完了します。

『汎 (Pan)』という単語は、コメンスキーの哲学を特徴づけています。すべてのために、すべてを含み、すべてを秩序づけるという意味です。哲学は、真実を追求する学問です。真実は、私達に精神的な安らぎを与えます。また、精神と物体が一つにとけあう調和を創り出します。宗教は、最高善に対する畏敬の念を育て、私達の良心に安らぎを与えます。政治は、人々の各々の活動がお互いにぶつかり合わないようにまとめます。その主な課題は、そのことによってあらゆる人々をお互いに結びつけることです。全智は、調和のとれた全体であり、どこでもいつでも全体のままの状態にあります。生きること、つまりは考えることその中心課題は、秩序です。『汎知』は、おそらくその意味で唯一の正しい方法です。この正しい方法は、このような原則で成りたっています。

- 一、あらゆる事物は、連関性の中で存在している。
- 二、あらゆる事物は、同じ方法で処理される。
- 三、全事物は、お互いに段階的に作用し合うように秩序だてられている。

まさに、この段階を追って統一される全事物のましまりが、汎知学の方法論の核をなしているのです。この方法を用いると、事物は常に後のものは、前にあったものに影響され、未知のものは以前に存在してより多く知られているものによって準備されるという工合に秩序だっていることとなります。私達の精神は、この方法によってより深いものへと導かれます。そして、事物と事物の間にけっしてすぎまがないように続いていることが大切です。私達が知識を獲得していく際も同様に、段階を追って低い水準から高い水準へ向かい、留まったところから新しい段階への出発をします。要するに、これが汎知の方法です。この方法は、昔の教育者ソクラテスが産婆術と名づけた真理探究の方法を新しくしたもので

す。また、コメンスキーのこの段階・統合説は、コソントの『三段階学説』に先立つものともいえます。

コメンスキーによれば、あらゆる事象、精神界は、低い水準から高い水準へと調和的に段階づけられ、どの事物もより小さな部分で構成されています。私達の精神も、自然なやり方で自己発達において、簡単なものから複雑なものへ、小さなものから大きなものへ、また部分から全体へ向かって始まるように形づくられています。知識を獲得することは、単に事物体系の知覚だけでなく、それ以上のことを意味しています。個々の人間の発達も、人類の歴史的な発展も、調和のとれた段階を追っています。コメンスキー自身が生きた証人でありましたが、目の当たりにしたチェコ民族の苦悩から、私達の民族がどのように導かれるべきかを示す努力をしました。

コメンスキーは、人類の発展を信じました。なぜ

なら、人類は限りなく学び続ける存在だからです。

この原則は、コムンスキーの教育についての考えだけでなく、他の学問体系、実生活についての考えにも適用されています。彼の説く宗教の教えについて簡単にふれておきましょう。それは、彼がその最後の牧師でもあり、哲学的指導者でもあったチェコ同胞教団にかかわっています。彼にとって、宗教はチェコ同胞団員のすべてにかかわることでした。それは、多分スラブ民族の宗教へのかかわり方を特徴づけることになっています。チェコ同胞団は、教義そのものよりも信仰と道徳性を重視しました。ミサも、教会組織もその人達にとっては副次的なことでした。(注・この後、同胞教団の他の指導者達、科学と神秘主義との結びつきについて続くが、省く。)

コムンスキーは、教会組織を国家と対応させて考えています。神を敬い、道徳を重んじる生活、真のキリスト教徒としての生活は、人間各自の課題にな

ります。その時、国家は副次的意義をもつだけです。しかし、コムンスキーは、『国家は、誰にとっても意義をもたないのだろうか』という疑問を投げかけます。学校は、未来の世代の人達を教育します。ですから、つまり学校は、社会を、国家を新しくします。あるいは、教会組織の改善は、同様に国家のそれと関連します。コムンスキーにとっては、君主国であれ、共和国であれ、どちらでもよかったです。国家は、道徳性を失ってはならないと考えました。そこに、チェコ同胞教団を見るのですが、コムンスキーは、戦争を全面否定するわけではありません。過去のチェコ同胞団も戦争(注・ターボル派が率いたフス戦争)で活躍しました。しかし、それでも、『キリストは、常に平和へ向けて助言する』と思いついて、戦争の野蛮さに目を向けています。』

——つづく——
(ブラハ在住)